

■（１４３）被害者への継続取材は古くて新しいテーマ

最近読んでいる小説のテーマは少年犯罪だ。国が犯罪被害者対策に取り組む転機となった山口県の母子殺害事件を連想させる内容。事件を起こした少年の更生が優先され、被害者のケアなどは置き去りにされているのではないかという、自らも取材で対峙したテーマだ。

国が被害者対策に本格的に乗り出したのは２０００年。それまでは新聞も、被害者や遺族がどういう状況に追い込まれるかを追いつけることはあまりなかった。被害者たちが声をあげ始め、マスコミも「見落とし」に気づいた。

自らも当時、誘拐殺人事件の遺族に初めてじっくり話を聞かせてもらった。通された部屋は日中もカーテンが閉まったままだった。直後に押し寄せた報道陣を避けるための防衛策だった。事件から５年以上が過ぎ、取材は途絶えていたのに、だ。つらい話を取材するのは、記者としてもつらい。それを言い訳に、被害者取材から逃げていなかったか。反省から、その直後、別の交通事故遺族の連載に取り組んだ。

あるブロック紙が最近、東日本大震災で「壁新聞」を出した新聞社の新人を取り上げた。過酷な体験をした被災者への取材を、当初はためらったという。乗り越えた姿が頼もしい。
（山）